

## Ch. 1

### Strangers to Ourselves: The Shortcomings of Introspection

#### 見知らぬ他人：内省の抱える欠点

In Abelson, R. P., Frey, K. P. and Gregg, A. P. (Eds.) *Experiments with people. Revelations from social psychology*. Lawrence Erlbaum Associates.

**元論文** Nisbett, R. E., and Bellows, N. (1977) Verbal reports about causal influences on social judgments: Private access versus public theories. *JSPS*, 35, 613-624.

Rep. 小森めぐみ.

### BACKGROUND

**本章の要旨** 私達の視覚システムの真実は、私達の精神生活の真実である（そのままの姿とは違う）

- ❖ 世界に対する我々の理解は、我々の心の構造によって決定される、心理的構造物
- ❖ しかし、私達は naïve realism を利用して、自分の見えるもの＝世界の本当の姿と考えている

**本章の強調点** 意識的な理解活動が心的構造物の産物なら、それが起きていることは気付けない

- ❖ 心の産物（信念、感情、欲求、判断）は自覚できるが、その産出プロセスは自覚できない
- ❖ 社会心理学の目標は、プロセスの解明、外界と頭の中で起きていることのつながりの発見

意識的な理解活動を必要とする心的作業＝自分の思考・行動を説明すること

例) 仕事が大変だったので彼氏にやつあたりをした

- ❖ このような説明はすべて自分が自覚し、理解できるような要因をもとにして行われている
- ❖ しかし、心的作業のほとんどは自覚できない⇒果たして上の説明は本当？完全？

証明するには二つの基準を満たす必要あり

- ①その要因が思考や行動に確かに影響した（していない）ということ
- ②この要因について尋ねられたときには、その影響を人が信じていない（いる）こと

—例) 女性（黒髪 or 茶髪）の印象形成を行う心理学の実験—

黒髪の方が頭が悪いと判断⇒髪色が印象に影響（基準①）

参加者が髪色は印象形成に影響せずと回答⇒印象形成過程に無自覚（基準②）

☆髪色の実験の結果は、髪色に関するステレオタイプで説明される(cf. 金髪の場合)

人はみな、思考や行動を説明する際に、文化的に共有された“何が人に影響を与えるか”に関する自分のしろうと理論を利用しているが、自分がそれに依存していることには無自覚  
⇒しろうと理論が正しければ説明も正しくなるが、その逆もありうる  
⇒状況を説明されただけの観察者でも、当の本人と同じ説明をすることができる<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 行為者も観察者もおなじしろうと理論を保持しており、個人的経験の内省ではなくその理論を説明に利用

**本章で紹介する実験 Nisbett and Bellows(1977)**

目的①：人々の心的プロセスにたいする口頭説明は、誤っていることが多いことを示す

目的②：誤った説明は、共有されたしろうと理論がもとであることを示す

**WHAT THEY DID**

**概要** 実験参加者は行為者と観察者にわけられ、ターゲット人物に関する情報を受け取った。行為者はこの情報を元に人物の印象形成を行うと共に、自分の評定に属性がどのような影響を与えたかを言語報告した。観察者は行為者の受けた実験のシナリオを受け取り、評定に各特性がどのように影響すると考えられるかを答えた。

**実験参加者** 女子大生 162 名（行為者 128 名/観察者 34 名）<sup>2</sup>

—行為者セッション—

**手続** 参加者はジル（女性）が架空の危機管理センターの職員にふさわしい特性を備えているか判断

**独立変数** ジルの5つの属性<sup>3</sup>（外見的魅力、優れた学業成績、交通事故遭遇経験、将来参加者と出会う可能性、聞き手の机にうっかりコーヒーをこぼしたかどうか）

**従属測度**

①ジルが持つと考えられる4つの特性（共感性、柔軟性、好感度、知能）。17点尺度

②5つの属性の有無がジルの特性判断に与えた影響（と参加者が考えているもの）<sup>4</sup>。7点尺度  
二つの従属測度から実際の影響と判断された影響が算出

実際の影響＝[特性があるときの印象の平均]－[特性がないときの印象の平均]<sup>5</sup>

判断された影響＝[特性があるときの各属性の影響の平均]

—観察者セッション—

**手続** 参加者は行為者セッションの概要を渡され、各属性の操作が印象に与える影響を判断

**従属測度** 5つの属性がジルの特性判断に与えるであろう影響。7点尺度（行為者②と同じ）

**WHAT THEY FOUND**

—行為者セッションの結果—

参加者はジルの属性が印象形成に与えた影響をひどくまちがえた（次頁 FIG. 1 参照）

20 の出来事のうち6つで参加者の実際の印象は彼らの信念とは逆方向にシフト<sup>6</sup>

⇒ジルの判断で生じたぶれに関する参加者の知識と実際の判断のぶれとは、ほとんど無関係

<sup>2</sup> 参加者が女性のみなのは、講義（心理学入門）の被験者プールで女性をより集めやすかったため。

<sup>3</sup> 各特性に関して、ある／なしが操作された→ジルの記述は2<sup>5</sup>=32パターン。1条件は4名。

<sup>4</sup> 一つの属性があることが、各特性にどのような影響を与えているかを一つずつ評定

<sup>5</sup> それぞれ64名分の評定の平均。

<sup>6</sup> 実際はネガティブな影響なのにポジティブな影響と答えた場合が5つ、その逆が1つ、影響がないのに“ある”と答えた場合と、ネガティブな影響があるのに“ない”と答えた場合を加えると、誤りは8つ

※ジルの知能についてのみ、ぶれに関する参加者の知識と実際の判断のぶれが正の相関<sup>7</sup>

- ❖ 知能が人の印象に与える影響については文化内で共有された **explicit rule** が存在
- ❖ ルールが存在しないような特性(ex.flexibility)については、判断に与えた影響を推測しきれず、内観もその不足を補うことはできない

F1 (16cm\*20cm)

---

<sup>7</sup> N=5 で平均の相関を取っており、手法としてはおかしいが、F 1 の結果をわかりやすくしている。

—観察者セッションの結果—

属性の有無が与えた影響に関する観察者の推測も、行為者と同様不正確

判断課題の有無という大きな違いがあつたにもかかわらず、行為者と観察者の推測値はほぼ一致  
⇒属性が与えた影響に関して行為者が下した判断は、社会で共有されたしろうと理論に基づくもの<sup>8</sup>

**SO WHAT?**

慣れ親しんでいること (familiarity) とそれについて専門的な知識があること (expertise) はちがう

- ❖ 参加者はジルについて実際に判断を下したが、属性が判断に与える影響を理解できず
- ❖ 研究者は判断経験がなくても属性が与える影響を理解できた

私達は、自分が思っているよりも自分についてわからないことが多い

- ❖ 社会心理学が理論化、測定、実験を通して発見した知見は、内観から発見することは不可能
- ❖ 社会心理学者は個人のパーソナリティと社会世界の連続的な相互作用に注目しながら、状況の与える驚くべき影響力を指摘 (19,23 章)

☆内観は社会的影響を指摘できない (Nisbett & Wilson, 1977; Wilson & Stone, 1985)

—ハロー効果の自覚の研究 (Nisbett & Wilson, 1977)—

参加者は、ベルギー訛りを持つ大学教官のビデオテープ①or②を視聴

ビデオ①教官はあたたかくて面倒見がよく、好感度の高い人物

ビデオ②教官は冷淡でよそよそしく、共感的でない人物

ビデオを見た後に、教官の見かけ、しぐさ、訛りがどの程度魅力的かを評定

⇒教官の態度がよかった場合の方が悪かった場合よりも、3つの特徴が好ましく評定

⇒参加者は教官の態度が特徴の評定に与えた影響に無自覚。

⇒逆に特徴の評定が教官の態度に関する自分たちの意見を決めたと回答

—誤帰属の研究 (Cantor, Illman & Bryant, 1975)—

男性参加者は[運動後 or 運動→休憩後 or 何もせず]アダルトビデオを視聴

⇒ビデオを見てもっとも興奮したと答えたのは、休憩した参加者

—平均点以上効果の研究 (Dunning, Meyerowitz, & Holzberg, 1989)—

人は、望ましいと考えられている特性が自分に備わっていると思いやすい

更に、自分は他人より平均点以上効果の影響を受けていないと考えやすい

(Pronin, Lin & Ross, 2002)

“私は確かに優れているけど、あの人が自分を優れていると思っているのはうぬぼれよ”

上記の研究と本研究への批判

<sup>8</sup> 要因間の有意な交互作用はどの分析でもほとんど見られなかった

①人の思考や行動には、妥当性の高い説明がいくつも存在する

⇒今回の実験では参加者は自分（の判断）に影響を与えると考えられる特定の要因について質問されている。これらの質問された要因の影響について参加者が誤っていたことは確か

②参加者の言語報告は、要因の影響のしかたの記憶とそれを統合する能力の欠如という二つの認知的欠陥の妥協の産物である

⇒これだけでは言語報告の不正確さを説明することはできない

行為者と観察者の言語報告がほとんど一致したのは、人々がしろうと理論に頼ったから

また、この批判は言語報告が不正確である理由にいくつか追加点を加えたに過ぎない

## AFTERTHOUGHTS

内観に頼った本当の思考、感情、欲求についても私達は誤っているのか？

- ❖ 私達は自分の思考、感情、欲求をわかってはいるものの、その継続時間や典型性については誤っている (Gilbert and others, 1998; Ch. 3)
- ❖ 例) 彼氏／彼女に対する愛情

自分の思考、感情、欲求に対する説明を試みたときに何が起きる？

- ❖ そのことについてもっとも典型的な理由にたどりついて、それを情報源とする
- ❖ 説明すること自体が目をつくらせてしまう可能性がある

—Wilson, Dunn, Kraft and Lisle (1989)の研究—

参加者は自分の彼氏／彼女に対する感情とつきあった期間を答えた。

⇒相手を好きであるほど長く付き合っていた。

⇒しかし、最初に相手を好きな理由を尋ねられた参加者にはこの相関は見られなかった。

☆内観が相手に対する感情の正確な知覚を妨げていた(Wilson and Kraft, 1993)

—Wilson et al (1993)—

参加者は（芸術的な or ポップな）ポスターを見た（一部の参加者はポスターが好きな・嫌いな理由を記述）後、各ポスターへの好意度を評定し、個人的に好きな一枚を持って帰った3週間後、自分のポスターの選択にどれくらい満足しているかが尋ねられた

⇒参加者は芸術的なポスターをより好んだが、理由を先に聞くと、好意度に違いは出ず

⇒更に、理由思考をした参加者は自分の選択への満足度が低かった

☆内観は芸術作品への嗜好性を一時的に覆したが、参加者は後になって自分の選択を後悔

- ❖ 内観の阻害的な影響は、人が自分の態度について確信がもてないような状況でだけ生じる
- ❖ しかし、内観に頼る人は自分の態度に確信がもてない。特に自尊心が低い人にこの傾向は典型的(Campbell, 1990)
- ❖ 確かな自己概念をほしがる人ほど、そのチャンスをつぶしているのかもしれない
- ❖ 非生産的な瞑想にふけるよりは、様々な状況に自分を置いて、反応を観察すべき。これによって、自分がどのように考え、行動するかがわかるだろう

## REVELATIONS

自分が何を信じ、何を感じ、何を望んでいるかをわかっている、  
そのことによって自動的にそれがどこから来たものかがわかるわけではない。

内省は文化的な決まり文句を反映したものであって、  
確実な洞察を与えてくれるものではないので、  
心がどう動くかを正しく示してはくれないのだ